

最優秀賞

テレビ神奈川社長賞

ずっとそばにいるよ

横浜市立北方小学校（中区）

五年 小阪 英輝

「ひで君、大きくなったねえ。」

ほくがおばあちゃんの家に行くとき、いつもニコニコしながらおばあちゃんが言うセリフは決まっている。「こんにちは。」ほくは、思いやりが深く陽気で楽しいおばあちゃんに会いに行くことが好きだ。

でも、ある日、おばあちゃんがこわれてしまった。静かだし、何より笑わなくなってしまった。ほくは、すごくびっくりした。お父さんに理由を聞いたら、「老人性のうつ」といって、心が風邪を引いている状態になってしまったそうだ。ほくは、お母さんに、「ただ寄りそって、受け入れてあげるだけでいいんだよ。」と教えてもらった。

でも、ぼくはいつもとちがうおばあちゃんが何だか恐くてそばに行けなかった。とても悲しいし、頭が落ちつかないし、心が痛いし、早く自分の家に帰りたいと思ってしまった。

夕方になり一人で庭で遊んでいてふと空を見上げると、きれいなまっかな夕日と三色に輝く空が広がっていた。

「？」

急にだれかがぼくの右手をつかんだ。緊張してちらっと見たらおばあちゃんだった。

「どうしよう。」ぼくは体が固まって動けないでいた。

「ひで君、大きくなったねえ。」

ふいにおばあちゃんがつぶやいた。

ああ、おばあちゃんはおばあちゃんだ。少しこわれてしまったけれど、おばあちゃんの手はいつもと同じ温かさだ。ぼくがもつと大きくなって強くなっておばあちゃんの事を守るよ。

ぼくは、この手のぬくもりと三色の空を決して大人になるまで忘れない。ぼくが大人になるまで、ずっと長生きしてね。

「ずっとずっと好きだよ。おばあちゃん。」